

# 苦手やけど好き 寂聴

岸 積

「文壇は新人を最初持ち上げても、すぐ引き落すところがあるなあ」と嘆いたのは、徳島新聞文化部長、篠原次郎だ。元城東高校の国語教諭で、恩師でもあった。私が駆け出し記者だった1957年早々、瀬戸内晴美（後、寂聴）は「女子大生・曲愛玲」<sup>オキ・アイリン</sup>で新潮社同人雑誌賞を受賞したが、10月に「花芯」を発表した際、「子宮作家」と酷評され、以後、文芸誌から干される。城東高校の前身、徳島高等学校時代から瀬戸内を知る篠原次郎にとっても、その扱われ方が案じられたのである。

「花芯」は「私の子宮が需める快樂だけを、私の精神も需めだしたのだ」などと書く。女が子宮を持つことが女の生にどうかかわるかを主題にしている。男性優位の当時、

女性みずから性愛を平然と描く作家はまれだった。文芸誌の匿名時評などで袋叩きされた。いわば女性差別であった。ポルノと決めつけ、作者は自分の感度のよさをこれみよがしに書いていると書く。まるでヒロイン即作者のごとく、つまり「花芯」を私小説と読み取っている誤りと卑しさがあった。

「花芯」を評価した作家は円地文子、室生犀星、吉行淳之介の三人。励ましの手紙をもらったと聞き、ホッとした。文学少年の成れの果てのごとき私が「花芯」に興奮し、酷評に反発していたことを、寂聴と新聞の取材で初対談した時に話したことがある。寂聴は理解されたことを喜び、「わかる？」と、笑顔で何度もにじり寄った。

身をもむようなしぐさで、相手に自分のすべてを注ぎ込んでしまような話し方をする。今なお色っぽさが漂って……。」「生まれつきサービスピ精神が旺盛で、無意識に努めてしまつて、気付かぬうちにとても疲れている」と照れるのだ。

二度目の対談をしたのは1984年。「阿波人物風景」という人物風土記の連載199回目。ぶしつけな質問にも楽しく応じてくれた。思えば寂聴は人生の達人で、人たらしと言われるほど、対談の名手であつた。

有名になつてから急にチャホヤするようになった故郷について――。「故郷は嫌いでした。因循で、文化への愛情がなく、お金もうけのことしか考えない人が多くて。古里はハエでも人を刺すついでしょ。芸術家はその冷たさに感じやすい。そして世に出るまでの私は、反道徳的でアウトローでしょ。批判されるのは当然だけど、のけ者にされるのは腹が立つのでしょうね」

なのに「寂聴塾」を始めた。「歳をとると思いは故郷に帰つていくの。肉親のように切つても切れぬ因縁なのね。故郷の文化が少しでもよくなるなら、そこで生まれ、そこで育ち、生きてこられたことへのお礼をしたい氣になつて」

子を捨てしわれに母の日喪のごとく

寂聴

戦後、夫の教え子と恋に落ち、幼い娘を置いて家を飛び出したことについて、「私は生涯後悔にもだえ抜いた。だからマスコミは夫や娘のことをタブーにしてくれたようね」と言う。頭の回転の速い寂聴は、取材対談後の執筆の先まで読んで、私にも「タブー」を暗示しようだ。

小学生の時から気の強い子供だつた。徳島高等女学校に一番で入学している。「何を教えられてもフォームを正確に会得することが天才的だつた」と本人が書いている。戦争の色濃くなつてきたところで、学校全体が軍隊式に編成され、彼女は大隊長にされて、朝礼で号令をかけさせられたりしている。

いっぽう、病弱な劣等性だつた私は、何でも「仕切り」たがるような優等生育ちは苦手であつた。「カナワんなあ」つて感じた。

「タブー」にしたマスコミは、スターになりゆく寂聴に付度したのだ。それによつて寂聴の夫は忘れられていった感がある。寂聴は不倫のことも書いて成功したのに、そりや

不公平ではないか。そんな記者根性みたいなものが手伝つて、私は元の夫とも対談。一カ月後に書いた。実名入りの記事だが、元夫であることには一切触れなかった。

その名は酒井悌<sup>てい</sup>。元国立国会図書館の副館長だ。

1948年の国会図書館創立前から図書館づくりに携わり、88年に退官するまで半生を捧げてきた「育ての親」であつた。図書館学の権威として海外でも知られた。

徳島市富田橋通り生まれ、旧制徳島中学校を経て、中国哲学で知られた大東文化学院卒。中国の古代音楽研究論文が認められ、外務省留学生として中国へ渡り、北京大学助教となつた。敗戦後、参議院調査部に入り、米軍の指導による国会図書館法づくりに参画した。退官後は全国図書館協議会会長、金沢工業大学理事、同大ライブラリーセンター初代館長。

仕事への自信と熱意にあふれる有能な官僚であっても、酒井のように退官してなお意欲を燃やし続けている例は少ない。金沢工大のライブラリーセンターは「大学専門図書館の革命」と言われ、注目を浴びていたから、酒井は律儀にセンターの理念、構成について、2時間にわたって「講義」してくれた。元の妻に話が及ぶ余裕などなかった。

寂聴は2006年、徳島県出身者として初めての文化勲章を受章した後、娘の許しを得たうえで、別れた夫の墓前に受章の報告をし、涙を流した。錦を着て故郷に帰ったような受章だ。84歳だった。

寂聴が99歳で逝つたのをテレビで知った時、私は思わず合掌した。死ぬ直前まで現役の作家と僧侶の「二刀流」を続けるなんてスゴイことだった。その寂聴にあこがれ、時にはその才に嫉妬しながら、大きな影響を受けた。同じ時代に生きられ、敬愛することができたことに感謝した。最後に、寂聴の言葉をいまし書いておく。

「自作の中で読んでもらいたい本をひとつ挙げよといわれたら、迷いなく、『美は乱調にあり』と答えますね。若い人には自分の気持ちに正直に恋と革命に生きてほしいものの」

それは関東大震災直後の混乱中、夫でアナキストの大杉栄とともに虐殺された伊藤野枝の伝記小説だ。「天皇制ほどナンセンスなものはない。私は天皇が責任を取らない限り真の終戦はあり得ないと思つてたわ。道徳なんて、権力者の都合のいいように、いつだって変わるんだから」

(敬称略)